

先学を偲ぶ

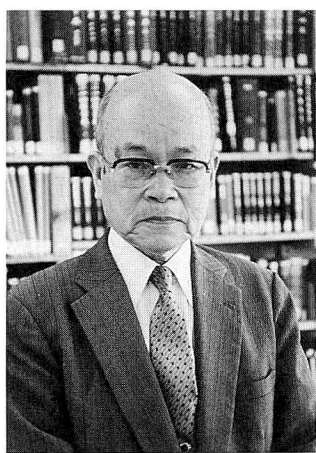
舟橋一哉先生のご業績

小 谷 信 千 代

平成十二年八月二十一日の未明に舟橋一哉先生が九十一年に及ぶ生涯をおえて示寂された。葬儀は同二十四日の午後御自坊の蓮泉寺本堂で営まれた。盆は過ぎていたのに暑い日であった。仏前には先生ご自身がお考えになった対法院釈一哉の法名が掲げられていた。本誌の編集会議で、門下生でもない私が追悼文を書かせていただくこととなった。

不遜であるとお叱りを承知の上で敢えて筆を執らせていただくのは、ただただ先生からお受けした学恩に衷心よりの謝意を捧げたいとの思いからである。それどこには私の記憶の中にある先生の想い出をたどりつつ先生の残された業績について述べさせていただくことをお許しいただきたい。

私が先生に初めて教えていただいたのは、大谷大学に入學した昭和三十八年の一回生時の「仏教入門」の授業である。自著『釈尊』を用いての授業は大変分かりやすく、先生ご自身新入生を教えることを楽しんで



おられたようで、いつも笑顔で講義をして下さり、毎回が楽しい授業であった。時々冗談を言って学生を笑わそうとされたが、その前にご自分のほうが顔を赤くして笑ってしまわれることがよくあった。茶目っ気が旺盛で、新製品の眼鏡を買ってこられた折に、「これはこんなことができるんだよね」と言って、懸けておられる眼鏡のレンズの部分を、両方の親指でめくるように上にあげて、小鼻をひくつかせるようにして示される自慢げな表情に、私たちは大笑いをさせられたこともあった。

先生には博士課程で『俱舎論』の講読をしていただいたが、当時は俱舎学の重要さに気づかず、先生から多くを学ぶ努力をしなかったことが今となっては悔やまれる。先生のご研究の大切さに触れるようになったのは、研究者の道を志して暫くした頃、自分に仏教の基礎的な知識が備わっていないことを痛感するようになってからである。

仏教を学ぶ上で俱舎学がいかに重要であるかについては、修士課程で山口益先生の中観論書の講読に出させていただいた折にしばしば耳にしていた。先生は、その重要さを教えるために、恩師ド・ラ・ヴァレ・ブサン博士が仏教の理解は『俱舎論』の理解と比例して深まると語られたことを引き合いに出されたことがあった。また別の機会には、先生が舟橋先生と共に訳されていた『俱舎論』世間品の翻訳の原稿が完成した日の朝、研究室で徹夜の作業をされた舟橋先生と顔を会わされたとき、舟橋先生のお顔が「脂が絞り取られて抜けてしまったような疲れはてた顔をしておられた」と述べられて、『俱舎論』の研究がいかに体力と根気のいる大変なものであるかを話されたこともあった。

櫻部建先生によれば、山口先生ご自身「私は仏教の勉強を俱舎から始めた」と語っておられたということである。その山口先生の俱舎学の師が舟橋先生のご父君の舟橋水哉教授であったということ（櫻部建「大谷大学の俱舎学の伝統について」『佛教学セミナー』第七十号、一九九九年）を知らされると、大谷大学の仏教学の歴史が偲ばれて興味深い。水哉教授には『俱舎の教義及び其歴史』（法蔵館、一九四〇年）という、読み物としても楽しい類書のない好著がある。このご父君の学問を継承された俱舎学は『業の研究』（法蔵館、一九五四年）として完成され、京都大学へ提出されて博士

の学位が授与された。また、山口先生が仏教学研究室で始められた「俱舍論の会」で修得された梵・藏・漢の諸本対照研究の方法による俱舍学は、『俱舍論の原典解明』世間品（法蔵館、一九五五年）・業品（法蔵館、一九八七年）の二巻として完成されている。

私にとって第一に重要な舟橋先生の業績は『俱舍論』の研究であるが、第二に重要なものとして原始仏教の研究がある。先生のこの分野の代表的な業績は『原始仏教思想の研究』（法蔵館、一九五二年）であるが、これは恩師赤沼善先生の阿含の学を継承するお仕事である。赤沼先生の、釈尊の縁起説には「有情数縁起」と「一切法因縁生の縁起」とを説く二種の縁起説がある、とする説はよく知られている。しかしそれらの二種の縁起説が相互にどのような対応関係にあるか、あるいはそれらはそれを別個に説く対応經典をもつものであるか、ということについてはよく理解されているとはいえない。

舟橋先生によれば前者は「有情が迷いの世界に流転する、その流転のすがたを説く縁起説」であり、後者は「迷いの生にあつては、すべては種々様々な条件によつて条件づけられて存在するもの、即ち条件に依存するものばかりであつて、条件を離れて、条件と無関係に存在するものは一つもない」ことを説く縁起説である。舟橋先生はこれらの縁起説の関係について、赤沼先生のように二種を無関係な説として截然と分けないで、「一切法因縁生の縁起」と「有情数縁起」とを縁起の有する二面と解釈し、原始經典に説かれる縁起説が、実際は有情数縁起のみであり、有情数縁起説にこれらの二面が意味されているとする考え方を提示された。

舟橋先生が一切法因縁生の縁起説を有情数縁起説の有する一面であると解するのを妥当とされるのは、一切法因縁生の縁起説は諸行が無常であることの論理的根拠を示す役目を果たし、それによつてこそ有情の生存の苦たる所以を示す有情数縁起説が成立し得ると思われる。つまり舟橋先生は、一切法因縁生の縁起説を、有情数縁起説にとつて、有情の生存の苦なることの論理的根拠を示すという意味をもつものと考えられたのである。私には舟

橋先生のこのお考えが釈尊の多様な縁起説を統一的に理解する上で重要な指針になるものと思われる。

私にとって第三に重要なお仕事は、先生が六十三歳の折に安居の本講を勤められたときの講本『曇鸞の浄土論註』（東本願寺出版部、一九七二年）である。本書は後に増補して『仏教としての浄土教』として再刊されている。この書には浄土門・念仏門の家庭に生まれ育たれた先生の身についている「仏教学も真宗学である」というお考えが著わされている。この書の中で先生は、官立大学における仏教学を「実証的仏教学」と呼ぶならば、大谷大学における仏教学は「主體的仏教学」と呼び得るものでなければならないことを強調しておられる。

先生は定年後、宗派内外の寺院の教区や組などの講習会や研修会などにしばしば出かけられ、明解なお話しぶりで多くの聴講者・参詣者を喜ばせられたそうである。私も学生時代に山陽教区の親鸞聖人の讃仰講演会で、先生が中村久子さんの苦難の生涯とそれを支えた念仏信仰の話をされるのを感動して聞いたことがある。ラジオやテレビの放送にも何度か出演され、その都度まったく時計を見ることなしに予定の時間にピッタリと話を終わられるので放送局の人が感心したという話を櫻部先生からお聞きした。かつてある国立大学の仏教学者が先生のそのような活動ぶりを批判して「お説教よりもっと研究に時間と労力を注がれるべきだ」というように言われるのを聞いたことがある。そのときはそうであろうと思ったが、先生が大乗仏教を「つねに釈尊が現在ただいまこの国にお出まし下さったとしたならば、どのような形において仏教をお説き下さったであろうかということにおいて、仏教を現代に生かして行こうと努力して来た」ものと捉えておられたことからすると、先生が法話等の活動に熱心に取り組まれたのは、先生の大乗仏教徒としてのお心が、ご自身の学問を単なる「実証的仏教学」にのみ止まることを許さなかったためであるようにも考えられる。それらのご活動も先生にとっては「主體的仏教学」の一端であったと思われる。そしてその「主體的仏教学」も先生の場合には決して単なる「お説教」ではなく、「実証的仏教学」を踏まえたものとなっている。そのことを以下に紹介しておきたい。

ここ数年、大学に通う車中で読むために、思い出したようにして『曇鸞の浄土論註』を書架から取り出しては携える、ということを繰り返している。それは往生と回向とに関する親鸞聖人独特の解釈の由来を知りたいと思つてのことである。しかし現在の私には、舟橋先生の講本から、その解釈の由来に、不退転・正定聚の概念を聖人が修道論の中にどのように考えて位置づけようとしたかという問題が関連しているのではないか、というようなことを想像することしかできない。私の想像の当否はともかく、そのように思わせられるに至った、先生の「主体的仏教学」の成果である『曇鸞の浄土論註』に示される「実証的仏教学」について少し述べておきたい。

この講本によつて論註の五受蘊・見仏・未証淨心・増上縁等の用語がインド仏教学の見地から明確にされたことは、阿含・阿毘達磨に造詣の深い舟橋先生ならではの功績であると言えよう。しかし最も大切なのは、論註の重要な概念である不退転・正定聚の語源を、パーリ相應部二二・一〇九の「預流の者・不墮法の者・決定せる者・等覺に向える者」という預流を語るときの常套句の中に求め、不退転を「不墮法の者」からの、正定聚を「決定せる者」からの発展とされたことである。見道・預流は初期の仏教においては究極的な解脱・涅槃と一つであると考えられていた。しかし舟橋先生によれば、その見道・預流における如実智見はやがて、如実智見者の自己反省の結果、それだけではなく未だ真の解脱・涅槃ではないと考えられるようになる。それが真の解脱・涅槃ではないとされるのは、そこに実践的な側面が欠けていることにある。そのことを先生は相應部二二・九〇に説かれる尊者闍陀の覺りと釈尊の覺りの違いを例に用いて説明し、釈尊の如実智見が尊者闍陀の如実智見と異なるのは、釈尊のそれが「実践的智慧」であつたからだとされる。如実智見が単なる真理の理解に止まらず、究極的な解脱・涅槃となるには「実践的智慧」でなければならぬとする先生のこの指摘は重要である。

正定聚・不退転が菩薩の修道論のどの段階に位置づけられるかに関しては、論書によつて説が異なることが先生の要を得た説明によつてよく理解できる。そこでは龍樹がそれを初地に置いて現生の益と考え、天親・曇鸞は菩薩の第

八地に當るものと考えて彼土の益とすることが明らかにされている。先生は諸論書における位置づけを詳細に検討された後に、親鸞聖人の位置づけの仕方について次ぎのように自問自答しておられる。

八地の不退と初地の不退とを一つにして、しかもそれを「現生不退」として理解することが、どうして可能であるか。原始仏教学の立場から見れば次のようになるであろう。正定聚・不退転の思想は、一般仏教学における見道・預流説の発展・展開であり、その見道・預流は初期の仏教においては究極的な解脱・涅槃と一つであると考えられていた。と同時に後世の仏教においては、正定聚・不退転は解脱・涅槃を相い去ること甚だ遠いというようにも考えられるようになった。

八地の不退と初地の不退とを一つにし、しかもそれを「現生不退」として理解しようとする聖人の意図を尋ねておられる所に先生の見識の深さと獨自性が窺える。それに対する原始仏教学者としての先生の立場からなされた回答は、初期の仏教において究極的な解脱・涅槃と一つであると考えられていた不退は八地に配せられ、後世の仏教において解脱・涅槃を相い去ること甚だ遠いと考えられるようになった不退は初地に配せられたが、両者は本来は一つのものである、というものである。そしてそれを「現生不退」とすることに關しては、

彼土の益としての正定聚・不退転が、娑婆世界における眞實信心の上に影を映したのが、現生における正定聚・不退転である

と言われる。しかし現生における正定聚・不退転を「彼土の益としての正定聚・不退転が、娑婆世界における眞實信心の上に影を映したものとされる先生の説明が私にはまだよく理解できない。聖人の上記のような考えが曇鸞の浄土思想に基づくものだとすれば、先生が言おうとされたことは、あるいは幡谷明先生が、浄土に往生すれば速やかに無上菩提を成就し得るとする確信を「この現身に賜った信心においてすでに与えられている」ものと捉えて、「煩惱成就の凡夫人が不断煩惱のままに往生することが出来ることにおいて、浄土は眞に眞實功德の世界としてそれ自体

を成就するということが、曇鸞の浄土観における確信である」(『浄土論註』東本願寺出版部、一九八〇年、一〇三頁)と述べておられることと趣旨のことであつたかも知れられる。愚鈍な上に怠惰な身には、今ごろになつてお聞きしたいことが色々出てくる。このことも先生ご在世ならば、是非ともお尋ねしたいことの一つである。先生の着実に完成された仕事を思うとき、われわれは心をひきしめて学業に励まなければならないと思う。

合 掌

* 本稿を草するに際して、舟橋先生の直接のお弟子にあたられる櫻部建先生にお話を伺わせていただいた。文中、舟橋先生の学問を、阿含の学、俱舍の学、梵藏漢諸論書解読の学という三本柱によつて形成されているとしたのは櫻部先生のお考えに基づいている。先生には所用を前にされての気ぜわしい折であつたに拘わらず、メモまで準備して下さり、わざわざ京都にお泊まりいただいてお時間を作つて下さつたことに心より御礼申し上げます。